

フィリピンにおけるウォータープロジェクト

水戸さくらRC 大木清美 会員

水戸さくらRCは創立が1991年ですから、今年で18年になります。会員数は多いときでも95名前後、最近では30名前後で推移しております。このような少人数のクラブでは人的な面からも、資金的な面からも大きな奉仕活動は困難な状況でありましたが、幸いにもCLPが実施されることによって社会奉仕、国際奉仕の壁がはずされて、その年度の軸足を社会奉仕か国際奉仕か、または新世代奉仕か、というようにその年度の重点奉仕活動を絞り込むことができるようになりました。

そこで、2008-09年度の奉仕プロジェクト委員会では国際奉仕を重点とした奉仕で行こう、と云うことになり、表記のプロジェクトを発足することになった訳ですが、これには当クラブの国際奉仕の歴史が関係しております。水戸さくらRCではこれまでに2回、大きなプロジェクトをフィリピンに対して行っております。

1回目はマニラ市のイントロムロスRC、ダウンタウンマニラRCと組んで「アイセーヴィング」プロジェクトを行いました。これはマニラ市の生活困窮者に対する緑内障治療を、マッチンググラントを利用して行ったものです。

2回目はやはりマニラ市ですが、マカティ地区に「語学教室」を作るプロジェクトです。マニラ市には学校に行けない子供たちが大勢居ります。そういう子供たちに少なくとも読み・書きだけでも教えて少しでも就職に役立たせようとの思いから行った事業です。これはマカティJ.P.リサールRC-会員は全員女性のクラブでした-とのWCS事業でした。大変困難なプロジェクトでしたがDDFを利用し、また水戸南RC、友部RCから賛助金を頂き、無事完成させることができました。

このようなプロジェクトでたびたびマニラを訪問していると、いろいろなロータリークラブのメンバーと知り合うことができ、また交友関係もできてきました。そういう中で今回お話をするフィリピンにおけるウォータープロジェクトです。

皆さんご存知のようにフィリピンは貧富の差の大きな国です。近代的な大きなビルの裏はスラム街という光景はテレビ、写真などで目にした方も多いのではないのでしょうか。

現にその場に立つと、これが人間の住むところかと愕然とします。もちろんインフラの恩恵などは無いに等しく、電気などは盗電-文字通り電線から電気を無断で引き込んで使う-は当たり前というようは状況で電気会社でも取り締まるのを諦めているような状況だそうです。

しかし「水」はそうはいきません。各自治体でも給水車などで対応をしておりますが、飲み水には対応できても生活用水には間に合いません。当然、洗濯はできない、掃除もおろそかになる、体は洗えないということでスラム全体が不潔になっていきますし、もし火事にでもなったら、と思うとゾッとしました。

私たちが2回目のプロジェクト「語学教室」で度々マニラを訪問していたときにこの状況を憂い、改善を訴えてきたのが今回、WCS事業としてパートナーになったイントラ

ムロスRCのアーノルド・サアベドラ会長（当時はエレクト）でした。

そこでアーノルド会長の要請で、共にマニラ中心地から約1時間（渋滞がなければもっと早いのですが）、モンテンルバ市のスラムを施策に行きましたところ、聞きしに勝る、とはこの事だと実感しました。長くはその場に居る事はできませんでした（もし普通に生活している人であれば確実に病気になります）。スラムの中は迷路のようで、その時の悪臭は、排水溜り、共同トイレの不潔さ、生活臭等の集合といっても過言ではありませんでした。また、市からの給水車が定期的に巡回してくるのですが、そのときにはスラムの住人が手に手にバケツ、ポリタンクなどを持ち、その中には小さい子供たちや、年寄りも少なからず居りまして、彼らにとってこの水汲みは重労働であることは明白でした。このような状況を1本の井戸で何百人の住民が救済できるならば、－もちろんスラム街はマニラ市だけでも無数にあるので1本、2本の井戸では焼け石に水ですが－井戸の設置は必要だと感じました。

このプロジェクトに関してはモンテンルバ市長も大きな感謝と共に関心を寄せてくれて、設置後のメンテナンス、電気量は全部市の予算で賄うと約束してくれました。予算の関係上、今回は8基の井戸しか設置できませんでしたが、開所式に行きましたところ、井戸近辺の環境が劇的に清潔になりましたし、住民の人たちが本当に喜んでくれている事は、彼らが最大限の開所セレモニーを開いてくれたことでも実感できました。